

は一句一偈末代に持がたしと、とかるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。

既に二十余年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴聞の俗人など来重科に行る。謀反などの者のごとし。法華經第四云、「而も此の經は如来の現在すら猶お怨嫉多し、況んや滅度の後をや」等云云。第二云、「經を讀誦し、書持することあらん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん」等云云。第五云、「一切世間に怨多くして信じ難し」等云云。又云、「諸の無智の人、惡口罵詈等するあらん」。又云、「國王・大臣・婆羅門・居士に向つて、誹謗して我が惡を説いて、是れ邪見の人なりと謂はん」。又云、「數數擯出せられん」等云云。又云、「杖木・瓦石もて之を打擲せん」等云云。涅槃經云、「爾の時に多く無量の外道有りて、和合して共に摩訶陀の國王阿闍世の所に往く○今は唯一の大惡人有り、瞿曇沙門なり○一切世間の惡人、利養の爲の故に、其の所に往き集りて、眷屬と爲りて善を修すること能わず。呪術力の故に迦葉及び舍利弗・目犍連を調伏す」等云云。天台云、「何に況や未來をや、理、化し難きに在り」等云云。妙樂云、「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くを喜ばざる者を嫉と名く」等云云。南三北七の十師・漢土無量の學者、天台を怨敵とす。得一云、「拙かな智公、汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を誘する」等云云。東春云、「問う、在世の時、許多の怨嫉あり、仏滅度の後、此の經

を説く時、何が故ぞ亦留難多きや。答えて云く、俗に良薬口に苦しと言うが如く、此の経は五乗の異軌を廢して一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破り、天魔を銘けて毒虫と為し、外道を説きて悪鬼と為し、執小を貶りて貧賤と為し、菩薩を拙しめて新学と為す。故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆い、二乗は驚愕し、菩薩は怯行す。此の如きの徒、悉く留難を為す。多怨嫉の言、豈唐しからんや」等云云。頭戒論云、(僧統奏して曰く、西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く禿頭の沙門あり。此乃ち物類冥召して世間を誑惑す等云云。論じて曰く、○昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。実なるかな法華の何況や」等云云。秀句云、(代を語れば則ち像の終りの初め、地を尋ぬれば則ち唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉、況滅度後と。此の言良に以有るなり」等云云。

夫小兒に灸治を加は必父母をあだむ。重病の者良薬をあたられば定口に苦とうれう。在世猶をしかり、乃至像・末、辺土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人、法華經・一切經をよめり。南北これをあだみしかども、陳・隋二代の聖主、眼前に是非を明めしかば敵ついに尽。像の末に伝教一人、法華經・一切經を仏説のごとく説給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明給しかば又事なし。今末法の始二百余年なり。「況滅度後」のしるしに鬪諍の序となるべきゆへに非理を前として、濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至寿にもよばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は、天台・伝教には千万が一分も及事なければ